第 495 回情報化研究会報告

この日は参加申込が 12 名でしたが 1 名が未接続の様子でした。京都からの参加が再遠方でした。講師は，大手電気メーカ 3 社での勤務経験を持たれ，IoT や AI に関する製造業のプロジェクトを支援されておられる。

最初に講師が大切にされていることとして①高い目標を通じて人を育てる②プロジェクトを成功させるため，どこまでも，どんなレベルまでも関わっていく③優秀な専門家と一緒にチームで解決にあたる，と挙げられた。そしてこれまでの幾つかの事例について良かった面，上手く行かない面を判るように説明いただいた。

プロジェクトを進める上で講師がチェックポイントとされておられることを紹介いただいた。それは①経営的な意義が明確か，②やりきる意志があるか，③意志を持つ人材が成長できるか，④競争優位を築けるか，の 4 点とのことだった。

AI 時代の競争優位は「高い性能・機能」が「良い評価」を生み，それが「多くのユーザー」につながり，それが「多くのデータや高いネットワーク価値」につながり，それが「高い性能・機能」につながる良いスパイラルを構築することとされた。それができると競合の大手でも，それをくずせないとのことでした。

「DX の壁」として，上手く行くか行かないかの分岐点を明確にするたとえ話をされた。15 世紀鉄砲伝来で仮想の X 国，Y 国，Z 国が鉄砲への対応で各々違う対応をとって，その結果が大きく異なることで対応方法の要点を解説された。

注目しなければならないのは，デジタルに大きな可能性があり，経営的な影響がでたり，競合条件が変わってしまうことが有り得るとのことでした。

報告者は今回の要点を次のように理解しました。若い人はデジタルに対応できるが問題意識は身の回りの範囲に限られている。一方，幹部は経営的な問題意識を持ちうるが，デジタルの発想がなく改革的な発想がない。若い人と幹部がチームを作り，大きな問題を改革的に対応するべきと。

質疑応答は色々な面からの質問が出され，予定時間で終了としました。